表象としてのアメリカ

――『抱擁家族』（小島信夫）論――

大　貫　　徹

1．はじめに

小島信夫の代表作である『抱擁家族』（1965年）については、江藤淳の『成熟と喪失―〝母〟の崩壊―』（1967年）をはじめとして多くの評者がいろいろな角度から論じている。最近では加藤典洋の『アメリカの影』（1985年）や上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子の『男流文学論』（1992年）がそうした例の代表的なものであろう。したがっていまさら論じる必要もないかもしれない。ただ、江藤をはじめとして加藤も上野たちも、この小説には二つの「アメリカ」があることにそれほど注目していないように思われる。具体的に言えば、家政婦みちよがもたらす「アメリカ」と主人公である三輪俊介がもたらす「アメリカ」である。筆者は二つの「アメリカ」のジェンダー的な違いに着目することで、今まで「〝母〟の崩壊」という観点から主として論じられてきたこの小説に、新たに、表象文化論的な分析を加えることができるのではないかと考えている。(1)

以下では、したがって「表象としてのアメリカ」という観点を中心に、これまでとは異なる文脈で『抱擁家族』について論じたいと思う。

2．価値の転倒

> 三輪俊介はいつものように思った。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れはじめた、と。そして最近とくに汚れている、と。
>
> 家の中をほったらかしにして、台所へこもり、朝から茶を飲みながら、話したり笑ったりばかりしている。応接間だって昨夜のままだ。清潔好きな妻の時子が、みちよを取締るのを、今日も忘れている。
>
> 自分の家の台所がこんなふうであってはならない。…

しかし、しぶい顔をして俊介が台所へ姿を現わしたときには、彼の声だけは優しかった。[2]

これは『抱擁家族』の冒頭部分である。ここで俊介は「家の汚れ」に強い不快感を示している。本来ならば、家政婦が来るようになると家の汚れがなくなるはずなのに、ここでは逆に、家政婦が来るようになってからこの家は汚れはじめたというのだから、俊介ならずとも苛立ってしまうのは当然と言えよう。もちろん、ここでの「汚れ」が単なる「汚れ」を意味しているだけではなく、ある比喩的な意味をすでに担わされていることは明らかである。したがって実際に汚れているかどうかとは無関係に物語を理解することは可能だし、実際、多くの評者はそういう形でこの小説を論じている。[3] しかし「応接間だって昨夜のままだ」とある以上は，すべて比喩的な話というわけにはいかないだろう。

実際、引用箇所に「家の中をほったらかしにして、台所へこもり、朝から茶を飲みながら、話したり笑ったりばかりしている」と記されているので、妻の時子も家政婦のみちよも家事をおろそかにしていることは間違いない。ではこの二人は一日中いったい何を話しているのだろうか。そもそも大学講師兼外国文学翻訳家を夫に持つ時子と家政婦のみちよではその育ちも受けた教育も大いに異なるはずである。その二人が、茶飲み話とはいえ、毎日、朝からずっと話をしているというのはどういうことなのであろうか。

ひとつ言えることは、「奥さま」「みちよさん」[4] と互いに呼び合いながらも、この二人には「主人と奉公人」という階層意識がきわめて希薄であるということである。だからこそ「妻の時子が、みちよを取締るのを、今日も忘れている」ことに、俊介は苛立つのである。しかし肝心の俊介自身も実際には同じ状況にいるのだ。俊介は家事をおろそかにしている時子やみちよを叱りつけることをしないだけではなく、先の引用にあるように、かえって優しい声を掛けてしまうのである。それに、そもそも、俊介は家長として振る舞うことが照れくさくてなかなかできないようなのである。たとえば以下の例のように。

「僕はこの家の主人だし、僕は一種の責任者だからな」とてれながら、俊介はいった。（6頁）

ときには妻の時子に「そうしなさい」と叱咤される場合さえある。

> 「家長として、堂々たるところを見せなくっちゃ」と時子はいって、彼の腰を一つ二つ叩いた。(66頁)

したがって、以下の引用にあるように、「奥さま」と「家政婦」とではどちらが主人であるか分からないことさえあるのだ。実際、奥さまの時子が家政婦のみちよにたえず訊き、それに対して、家政婦の方は自信たっぷりに答えるのである。

> 「だって、ねえ、みちよさん、アメリカでは妻が家の中の責任をもつんでしょ」(と時子がいった)
> 「それは、そうですわ。その代り、ちゃんとしたときにはきっとだんなさまにうんと可愛がってもらうんですわよ」(とみちよは答える)(6頁)

3．二つのアメリカ

どうしてこのようなことが起きるのか。それはまず第一に家政婦みちよが「アメリカ」に通じているからである。そのようなことがなぜこのような事態を生むかと言えば、それは、私たちが実際に経験してきたように、アメリカが「戦後の日本」にあってあらゆる価値基準となってきたからである。「戦後の日本」はすべてアメリカ経由で形作られてきたといっても過言ではない。それは科学技術ばかりではない。音楽や美術といった芸術面においてもすべてアメリカ経由でその善し悪しが評価されてきたのである。時子の場合には夫婦のあり方や家庭のあり方さらには女の新しいあり方とも密接に結びついているのだろう。

ではみちよがどうしてアメリカに通じているかと言えば、何のことはない。「みちよの妹が（略）老外人ヘンリーのオンリイをしている」(7頁)からに過ぎない。本来ならばこうした存在は奥さまである時子にとっては軽蔑以外の何ものでもないはずである。しかし今の時子にとってはそうではない。むしろアメリカに通じているということで時子の尊敬を勝ち取っているのである。つまり「アメリカ」を起点としてここでは本来の価値がくるっと回転してしまっているのだ。

ところでアメリカと言えば、実は、夫である俊介は「日本文学の翻訳紹介者として二年前にアメリカの大学に出張して一年間滞在した」（8頁）ということになっているのだから、この時期（1965年当時）としてはきわめて貴重なアメリカ体験者のひとりなのである。にもかかわらず俊介のアメリカは「彼が語るアメリカの知識には時子はわざとのように耳を傾けなかった」(52頁)とあるように、ほとんど無視されてしまうのである。どうしてなのだろうか。

まず考えられることは、俊介のアメリカとみちよのアメリカとは質的に大きく異なっているということである。大学講師でもある知識人の俊介のアメリカがいわば文化的な、高尚なアメリカとすれば、みちよのアメリカは「オンリイ」の妹を通じて入ってくるアメリカである以上、サブカルチャー的な、きわめて俗っぽいアメリカであるだろし、強いて言えば女から見たアメリカとでも言うべきものであろう。だからこそ、引用にあるように、「だんなさまにうんと可愛がってもらうんですわよ」というような言葉がみちよの口から陸続と出てくるのである。

おそらくここにはそれまでの男性文化に対する批判があるのだろう。これまで多くの知識人がもたらしたアメリカ、先に「文化的な、高尚なアメリカ」と呼んだものは、ジェンダー的に見れば男性の観点から眺められたアメリカである。俊介のアメリカも基本的には同じであろう。これに対して、みちよのもたらすアメリカは、女性の観点から眺められた、もうひとつのアメリカと言えるのではないだろうか。先には、これを「サブカルチャー的な、きわめて俗っぽいアメリカ」と呼んだが、むしろこれを「日常的なアメリカ」とでも呼ぶべきかもしれない。もちろん俊介も、アメリカ体験者として、たとえば「外国の家庭生活について」(27頁）というような題名で講演をすることもある。しかしみちよに言わせれば実際には何も知っちゃいないということになるのだろう。事実、この小説全体にわたって、俊介は「日常的なアメリカ」にまったく無知であることを露呈するばかりである。このことに対して、時子は、たとえば以下のように激しい嫌悪感を示すのだ。

> ジョージが勤務している（キャンプの）飛行場のターミナルの応接間で、しばらく待つことになったとき、時子のオーバーを脱がそうとすると、彼女はその手を強く払いのけてしまった。
> 「だって、これが礼儀なんだろう」

と俊介がなじった。
「見っともないわよ」(と時子は言った)(10頁)

ということは、ここでも同じく、価値の転倒が生じているのだ。大学講師兼外国文学翻訳者でアメリカ滞在体験者を夫に持つ時子ならば、自分自身が女性であっても、それまでの男性文化の価値意識の中で育ってきている以上、「文化的な、高尚なアメリカ」に対して親しみを覚えているはずである。むしろ「サブカルチャー的な、きわめて俗っぽいアメリカ」は軽蔑の対象であったはずである。その点、家政婦のみちよやオンリイをしているみちよの妹とは根底的に異なっているはずである。というのも彼女たちは男性文化の埒外で自己形成をしている以上、そうした価値意識から比較的逃れやすいと考えられるからだ。ところがここでの時子はそうではない。「日常的なアメリカ」こそが、時子にとって、もっとも魅力的なものとなり、その逆に、夫の俊介を通じて入ってくる「文化的なアメリカ」が、むしろ唾棄すべきものになっているのである。そして、そうした嫌悪感の延長上において時子は若いアメリカ兵ジョージと肉体関係を結ぶことになるのである。ハイ・スクールしか出ていないジョージに対して、俊介は即座にホイットマンの詩を暗唱してみせるほどの教養も知識[5]も持ち合わせている。しかしここでの時子にとっては、俊介のこのような教養も知識もほとんど価値を有しなくなってきているのだ。その分、逆に「日常的なアメリカ」そのものであるジョージに時子は接近していくのである。

4. 戦後日本

どうしてこのようなことが生じたのであろうか。おそらくここには、自分の夫である俊介に対するというより、むしろ男性文化そのものに対する激しい批判があるのだろう。時子は言う。

「ああ、ほんとに一日一日とくれて行く。こんなことをしてくれてゆく。あんたはこうして私をいじめて暮せばいいわよ。ああ返してよ。さあ返してよ。」
「何を返すのだ。若い頃でも返せというのかね」俊介は声を出して笑った。
(略)

「返してよ。ほんとに、私の若い頃を返してよ、といっているのよ」(44頁)

「私の若い頃を返してよ」という時子の叫びは、具体的には、数度にわたる顔の整形手術に繋がることになるのだが、しかしこの叫びは、小倉千加子の言うように「この妻は、夫が自分に恋愛しているとは思わないけれども、自分を必要としていることに対しては絶対の自信があるんですよ。でも、そんな自信なんていうのは吹けば飛ぶようなもんで、実際、力関係ははっきりしてしまっている。(略) 対等対等というふうなのをずっとゲームでやっているのに、気がつけばすっかり抑えこまれている」[6] ことをようやく遅まきながら自覚した時子の心からの叫びなのである。もっと言えば男性文化の中で「対等ゲーム」をいい気にやってきてしまったことへの後悔の叫びなのである。こうした思いのとき時子の前に家政婦みちよが登場してくるのである。このみちよを通して時子は新しい価値に触れることになるのである。そういう意味ではみちよは単なる家政婦ではない。文化人類学の謂うトリックスターに近い存在であろう。かくして三輪家に若いアメリカ兵ジョージを引き入れることで、秩序の中に混乱を生じさせることになったのである。

しかしみちよだけが時子に価値の転倒を生じさせたわけではない。もうひとつの大きな存在がある。それは戦後日本そのものである。そもそも、鬼畜米英で戦ったにもかかわらず、敗戦後はすぐに戦勝国アメリカになびいてしまった日本。心の底では「Go Back Home Yankee! 」[7] を叫びながらも、アメリカの圧倒的な豊かさの中で平和を享受し、同時に経済的な豊かさをも獲得して行った日本。昭和天皇に象徴されるように、敗戦という現実にほとんど直面することなくそのまま戦後に移行してしまった日本。このように、戦前がずるずると戦後に繋がる一方で、新しく、「敵国」アメリカが進駐軍あるいは米軍キャンプとして日本に駐留することになる。つまり戦後の日本には、あえて簡略化して言えば、「戦前」も「敵国」も「戦後」も「民主主義」も「近代」も「平和」も、有りとあらゆるものが混在しているのである。いわば価値の無政府状態がここにあるのだ。これを言い換えれば、氏素性がどうであろうとも豊かでありさえすれば勝ちということである。これこそまさに「オンリイ」である「みちよの妹」の世界である。

「時代の子」と読むことも可能な名前を持つ妻の時子がこうした中で、次第に、俊介に代表されるような男性文化に裏切られた思いを覚えるようになっ

ていったのも当然であろう。このとき時子は呟く。

> 「やっぱり、そうだったの。考えてみれば虚栄心でいろいろなことを思ったり、してきたのね。くちおしいことをしたわね。今になると、くちおしいなあ」(74頁)

そしてこの「くちおしい」思いがもたらす喪失感の中に、まず、みちよが入り込み、その後に「みちよの妹」が入り込んでくるのである。したがって時子の相手がアメリカ人（ジョージ）であることはきわめて必然的なのである。

> みちよの妹が、ジョージの後見人みたいな恰好になっている老外人ヘンリーのオンリイをしている。(略) もともとあのヘンリーに遊びにくるようにいったのであった。それなのにこの青年（ジョージ）がくるようになった。(7頁)

ジョージとはまさに老外人ヘンリーの代替物そのものなのである。

5．もうひとつの姦通小説

しかし「みちよの妹」ならば問題はなかったことが時子の場合には問題となる。それは時子には俊介という夫がいるからである。つまり「姦通」ということである。ただこの場合、普通の「姦通」とはいささか異なっていると思われる。普通は、夫を意識しながら、でも夫以外の男と肉体関係を持ってしまったという場合であろう。その典型が志賀直哉の『暗夜行路』に登場する直子である。そこには「あやまち」という感覚がある。だからこそ夫である時任謙作は妻を責め、妻である直子は夫に許しを請うという事態となるのだ。しかし時子の場合はそうではない。そこにはまず「あやまち」という感覚がない。だから責めることもなければ許しもない。この辺の事情について評論家の平野謙は『暗夜行路』と比較しながら以下のように論じている。

> 細君の肉体的なあやまちは、無条件に『暗夜行路』の女主人公の倫理的な負い目として措定され、その措定のただしさを何人も疑おうとしていない。(略) これらの場合、細君たちはすべて審かれるものとして描かれ、そういう被告以

外の立場を、作者たちは想像することもできないかのようである。(略)『抱擁家族』の主人公と女主人公とは、『暗夜行路』のそれとはちがって、もはや明確な倫理意識を喪失した男女なのである。だからこそ、主人公は姦通されてもなんといって女主人公を呶鳴りつけたらいいかに迷わざるを得ないのだし、女主人公はこんなことぐらい我慢しなくちゃ駄目よ、とかえって主人公を叱りつけるのである。[8]

ここで平野は「『抱擁家族』には「もはや明確な倫理意識」がないと述べているが、この点は違っているのではないだろうか。というのも、時子は、何よりもまず、「日常的なアメリカ」と経済的な豊かさを同時に所有したかったのである。もっと簡単に言えば、俊介が叫んだように、時子は「明確な倫理意識」を云々する以前の段階で「アメリカを家に入れるつもりであのチンピラをひきずりこんだ」[9] のである。繰り返せば、ジョージが魅力的であるから肉体関係を結んだのではなく、あくまでもアメリカと肉体関係を結びたかったから、そうしたのである。このことは、実は、俊介もよく分かっているのだ。だからこそ以下のように考えるのである。これは皮肉でも何でもない。彼は、真実、このように考えているのだ。

どうしてもっと、時子とジョージを放っておいてもっと続けさせてやらなかったのだろう。どうせ一度やりかけたものなら、続けたって同じことではないか。(49頁)

もちろん俊介は時子とジョージの関係を知って激怒する。しかしその激怒は、実際には「たとえば、女房が何か男としでかしたから、といって、それをいけないという根拠はありはしない。ただ不快なだけだ」(136頁) とあるように、生理的不快感からくるものなのだ。[10] まさに小説の冒頭で「家の汚れ」に不快感を示しているのと同じなのである。したがって俊介は、時任謙作のように、妻の「あやまち」に悩み、ひとりで大山に登るようなことはしない。俊介が行うのはきわめて技術的な「汚れ」解消法だけである。なぜならば

たとえば、女房が何か男としでかしたから、といって、それをいけないという根拠はありはしない。ただ不快なだけだ。としたら、そのとき、その不快さ

をとり除く方法があれば、それでいいということにもなる（136頁）

と考えるからである。そしてこのことが家の新築を巡る騒動へと繋がるのである。言うまでもなく、家のことにかかり切りになることで、俊介は不快なことを忘れようとしたのである。

それはまず俊介が家族の前で突然「この家に大きな塀がほしい」（50頁）と言い出すことからはじまる。

> すると時子はひとりごとのようにいった。
> 「塀よりも家の中を直さなくっちゃ。あの台所は失敗したなあ。あんなものじゃ台所なんていえないわよ。それともそのくらいの費用をかけるなら…」（略）
> 「それならば、知らぬ土地へ引越しをすればいいじゃないの」（略）
> 「こんど作るのなら、どうしたってアメリカ式のセントラル・ヒーティングというやつにしなくっちゃ」と時子は呟いた。（51—52頁）

こうしたやりとりの結果「小田急で新宿から40分の、奥まったT町の傾斜地を念頭においた（略）ガラス張りの家で、冷暖房が完備」（53頁）という家が建つことになったのである。しかしその家は雨漏りをはじめとして、なぜか、たえず修繕を必要とする事態に見舞われる。したがって俊介はその修復に追われる日々を過ごすことになり、かくして、不快なことは否応なしに忘れざるを得ないのである。

> 雨が降るとベランダから直接、居間へ雨が何カ所からも漏る。時子の寝ている日本間へ、雨が流れ落ちると、彼女は火がついたように叫びはじめた。雨漏りは補修されたが根本的にやり直さないものだから、相かわらず漏りつづけた。（略）彼は特別製のパテを亀裂に塗り込んだり、花壇の箱をこさえたり、暇さえあれば家のことにかかりきっていた。（54頁）

しかし技術的な「汚れ」解消法だけで、時子の姦通事件は乗り切れるのであろうか。実際これでは乗り切れず、あたかも天からの「罰」であるかのように、時子は「乳ガン」に冒されるのである。そのとき俊介は自らに問う。

> なぜこの病気がおこったのだろう。なぜあのことがおこったのだろう。この

病気のために、あのことがおきたのだろうか。この病気のために、あのことがおきたのだろうか。あのことと病気とは何のかんけいもなかったのだろうか。(60頁)

しかしこうした問いが真剣に追求されることはない。次の瞬間にはそうした問い自体を忘れてしまうのである。ある意味ではすべて「一時しのぎ」にすぎないのである。

6．おわりに—自然に解消すること

かくしてこのような状態のまま、時子の乳ガンも進み、肝心の新しい家も雨漏りがますますひどくなり、さらには冷暖房も利かなくなってくる。至るところにほころびがますます生じてくるのである。しかし俊介は根本的な解決策を取ろうとはしない。そのうちにやがて時子の病状が進み、結局は死んでしまう。すると必然的に「姦通」という問題は解消してしまうことになる。いわゆる自然消滅である。何ら解決しないままに、問題が自然に消滅してしまうことで、あたかもそうしたことがなかったかのように過ぎていってしまう。家についても同様である。相かわらず家の雨漏りは直らない。しかしそれも、家の他の修復作業にかかりきりになる[11]ことで、いつしか自然消滅状態となり、次第に気にならなくなってくるのである。俊介はこうした生き方に対して以下のように述べている。

俊介は時子が死ぬということを、信じていなかったのは、なぜだろうか。彼女はまだ生きているからであった。俊介は、時子がミイラのようになっているということに気づいていながら、ほとんど気づいていないも同然だったのは、もちろん毎日彼女を見ているからだ。(略) そういうまちがいは、傍眼には、どんなふうに映ったであろうか。映ったことはどうでもいい。そういうまちがいを、おなじように、夫婦二人してくりかえしてきたのではないだろうか。鉄骨を何本も打ち建てた自分の新しい家が恥さらしになって嘆き悲しんでいるのが、自分の肌のように感じられた。俊介は憎しみを感じていた自分の家に愛着をさえ感じた。(99頁)

俊介はしかしながら最後にはこうした自分に愛着を覚えているようである。実際、俊介はこのような生き方しかできなかったのである。ある意味では戦

後日本も同じであろう。いつまでも根本的な解決を図ろうとはせずになし崩し的に問題の自然消滅を待つばかりである。しかしこれが私たちの現実であるならば、善し悪しは別にして、それも致し方がないのではないか、俊介は最後にそうした認識に到達したように思える。

註

（1） 小島信夫が、芥川賞受賞作である『アメリカン・スクール』（1954年）以来、アメリカに執拗にこだわってきた作家であることは間違いのない事実である。しかし『抱擁家族』においてはそれまでのアメリカとはいささか異なるアメリカ像を描き出しているように思える。それをここでは論じたいと考えている。

（2）『抱擁家族』からの引用は特に断らない限りすべて『小島信夫全集・第3巻』（講談社、1971）からである。この箇所はその5頁からの引用である。以下は煩雑さを避けるためにその頁数のみ本文中に記す。

（3）その代表例として江藤淳を引用しよう。江藤はこの一節を引用した後、以下のように述べている。江藤にとっては「家」も「汚れ」も比喩的なものにすぎない。

> これはしかし俊介の倫理的判断の表現ではない。むしろ生理的不快感の表現である。そしてその不快感の背後には、いわば母親に見棄てられかけた子供のそれのような濃い不安が隠されている。（略）「家」とは主婦にとって単なる物質ではなくてその精神の延長であり、いわば彼女の存在そのものである。そういう「家」が俊介の見ている前で「汚れて」行く。（『成熟と喪失―〝母〟の崩壊―』河出書房新社、河出文藝選書、1975年、30―31頁）

（4）互いに呼び合っている場面を引用する。

> 時子は、俊介から視線をそらした。そしてみちよに話しかけた。
> 「みちよさん、この人は私を連れて行くというのですよ。珍しいこと」
> それから時子はふりきるようにいった。
> 「誰が行くものですか。この人と二人きりになったって、ちっとも面白くないわよ」
> 「奥さま、行ってらっしゃいませよ。私なんか主人がいないから羨ましいですわ。中年の夫婦の旅行はいいものですわよ」とみちよが甘えたようにいった。（5頁）

（5）その場面は以下のようである。

> ホイットマンを知っているか、自分はハイ・スクールで習ったことがある、とジョージがいった。（略）
> 「ああ、'To A Stranger' という詩だな」
> 「そう、そうです」とジョージがこたえた。

その英文の原詩を俊介が時子にきかせた。時子はそれにうなずきさえしなかった。（7頁）

（6）上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』（筑摩書房、1992年）の227頁にある小倉千加子の発言。

（7）この言葉は言うまでもなく、ジョージに向かって俊介が投げかける言葉である。

出てくると俊介は大きな声でまったく思いがけない言葉をわめいた。
「ゴウ・バック・ホーム・ヤンキー。ゴウ・バック・ホーム・ヤンキー」（34頁）

（8）平野謙「『抱擁家族』の新しさ」（『小島信夫全集・第5巻』（講談社、1971年）所収月報5から）

（9）これは俊介が時子に向かって言う言葉である。その前後をも含めて引用する。

「お前はお前でアメリカを家に入れるつもりであのチンピラをひきずりこんだのか」
「そうよ、その通りよ。あんたがそう思うんだからそうよ。あんたは彼がきたとき、そう思ったでしょう？だから私はその通りになったのよ」（23―24頁）

(10) 引用3の江藤淳の一節を参照されたい。たしかにここで筆者は江藤と同じ語句を使っている。しかし江藤がここから「母親から見棄てられた子」という話に展開していくのに対し、こちらは「不快感の一時的な解消」へと論旨が進むのである。あくまでも比喩的な話に終始している江藤に対し、こちらはまさに「汚れ」を実際に除く方法を述べることになるのである。

(11) 該当箇所を以下に引用する。

あくる朝、良一は木崎とシャベルを買いに行くといった。考えもせずに始めては困る、といったが、大丈夫だ、とこたえた。帰ってくるとベランダの下の傾斜地を二人で掘っては土を運びだした。俊介は自分も庭におりてそこから二階を仰いで山岸に手伝ってくれないか、と声をかけた。山岸は俊介のいうままに俊介といっしょにモッコかつぎを二日間した。（115頁）